九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

先哲叢談聚議 梁田蛻巌 : その十

雅俗の会

https://doi.org/10.15017/4741991

出版情報：雅俗. 10, pp.215-220, 2003-02-25. 雅俗の会
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

先哲叢談聚議 ――梁田蛻巖――

《連載　その十》

雅俗の会

■梁田蛻巖（巻六）

梁田邦美。本名邦彦。字景鸞。小字才右衛門。號蛻巖。武藏人。仕赤石侯。

梁田邦美…仕赤石侯　梁田象水撰「顯考赤石教授蛻巖府君行述」（『蛻巖集』〈前編八巻後編八巻十六冊。寛保二年～安永九年刊〉後編附録、『史氏備考』巻九など。以下「行述」と略す。）に「府君字ハ景鸞。諱ハ邦美。初ノ諱ハ邦彦。産二于武州一。…因テ自號二蛻巖一。藤姓梁田氏」とある。また、「梁田先生蛻翁邦美墓碣」（黒田義隆編『梁田蛻巖全集』〈平成八年刊〉所収『象水集』に拠る。以下、「墓碣」と略す）に「顯考名邦美。字景鸞。號二蛻巖一。又號二窟齋一。藤姓梁田氏。初稱二才右衛門一。後請レ老改二蛻翁一。…生二于江戸神田一享保四年己亥夏。為二赤石教授一」。寛文十二年正月二十四日生、宝暦七年七月十七日没、八十六歳（「墓碣」）。墓所は兵庫県明石市本立寺。

蛻巖生而穎悟。幼學。人見鶴山。漸長。才識高遠。尤工詩。才既絶倫。而鑽研至老不止。年二十六。介鶴山。見白石。白石不妄容人。獨異蛻巖之才。與之交。肥肥見中底。江邨北海曰。讀蛻巖之集。譬猶上崑崙之邨。步步是玉。入稱檀之林。枝枝是香。詩至於此。宜無遺論。而猶有未盡善者何。也蛻巖用才太過耳。張茂先謂陸士衡曰。人常恨才少。而子更患其多。余於蛻翁復云。

蛻巌生…人見鶴山　人見鶴山は人見竹洞。幕府儒官。寛永十四年十二月八日生、元禄九年正月十四日没、六十歳。蛻巌が竹洞の門人となったことは「行述」「墓碣」「梁田邦美自叙傳」（『梁田蛻巌全集』所収、以下「自叙伝」）などで確認できるが、入門した年齢に関しては「十一歳」（「行述」）、「十二」（「墓碣」「自叙伝」）の二説に分かれる。

年二十六　蛻巌二十六歳は、元禄十年。

介鶴山見白石　白石は新井白石。幕府儒官。明暦三年二月十日生、享保十年五月十九日没、六十九歳。「行述」に「府君年廿六。因二田伯隣一、始テ謁レ公」とあり、師鶴山の紹介により白石に謁したとする本文と齟齬する。鶴山は、元禄九年正月十四日に没しているので、鶴山即ち竹洞を介して白石に面謁したというのは念斎の誤記。白石の高弟である田伯隣の仲立ちにより白石に見える機会を得たとする「行述」の記述によって訂正すべきである。田伯隣は、益田鶴楼。漢詩人・薬商。生没年未詳（補註）。

白石不妄容人　「行述」に「公（田邉註：白石のこと）性簡重。高持二風裁一。不二妄一容接一」とある。

獨異蛻巌之才…見中底　「行述」に「公見而奇トシ二其文一、延テ齒二門客一、懇款備ニ至。乃毎二為レ詩為一レ文、輙就而質ス焉」。白石編『停雲集』（享保三年序、二巻二冊）には、木下順庵門下の作を中心に二四名の作品二六〇首を収めており、そのうち一三首が蛻巌の作。同書中、蛻巌に註して「景鸞少シテ以レ材ヲ聞ユ。歴二事シ列国ニ一宦游不レ遂。在テ二窮阨ニ一文章甚富」という。

江邨北海曰…復云　江邨北海は儒者。正徳三年十月八日生、天明八年二月二日没、七十六歳。北海とその弟清田儋叟は、明石において蛻巌と忘年の交をもった。この箇所、北海著『日本詩史』（明和八年刊、五巻三冊）巻四より引用。張茂先は帳華。西晋の名将・学者。陸士衡は陸機。晋の詩人。〈本文異同〉讀蛻巌之集――今讀其集。蛻巌用才――蛻岩用才。

蛻巖既爲伊洛學。又信此邦神道。又博讀釋典。恒言云。
宣聖之學。東方之道。乾毒之教。鼎足不相悖。

蛻巌既…復信此邦神道　伊洛学は朱子学、即ち朱子学

を奉ずる竹洞に師事したことをいう。また神道を信奉したことについては、「行述」に「初メ在二都下一、従二横山當永氏一學二神道一。後入二吉川家之門一、聞二惟足氏之説一、講二習日本紀中臣祓等一。又讀二山崎垂加翁所レ神書一、頗左二袒ス其説一」とある。

博讀釋典　「行述」に「壮歳参二勝林ノ中華和尚一。閲二圜悟大慧等ノ諸録一」とある。

宣聖之学…不相悖　「行述」に見える。〈本文異同〉鼎足不相悖――蓋相為鼎足、而不相忤。

少時專談武説兵其評古之勇將戰士也論議慷慨有烈丈夫風言或及周瑜赤壁謝玄淝水織田信長桶狹間上杉謙信川中島等事則扼腕按劒躍如色飛當世名爲霸儒年四十八事赤石侯先是與世龃龉游仕屢不遂家唯壁立其詠雪詩序云余頻年窮甚書箧中除四子外有詩韻一冊徐文長集半部又嘗作不能買書詩有惠車鄰架滿天地誰信空拳猶窶圜之句

少時專談武説兵…烈丈夫　この条「為覇儒」まで、「行述」より抄書。また「梁田氏家譜序」（『蛻巌集』後編巻五）に「元禄初、美未レ仕在二江東一。慷慨尚ヒ気節一、見レバ侯媚ノ人ヲ輒欲レ嘔ト。磊落ノ人ニハ而一面定ムレ交。又喜デ與二劍客兵家諸豪傑一游ヒ…」とある。蛻巌が議論を交わした相手として「行述」には、例えば兵家では高田閑甫・本多鼠生・高松正春、劍客では真里谷某・伊庭是水・竹光柳風軒、馭師では斎藤定易・根岸某といった人物が挙げられる。

言或…川中島等事　このほか、「行述」では、「織田信長桶狹間」の後に「信玄氏ノ戸石」が挙がる。

年四十八　蛻巌四十八歳は、享保四年。

事赤石侯　赤石侯は播磨明石藩主松平直常。「行述」には「享保己亥ノ夏、筮二仕シ赤石一…」とあり、「自叙伝」には「享保四年己亥夏、為二我先君要体公一所レ辟、以テ二月支二十口ヲ之キ赤石一教二授ス邑ノ人士ヲ」とある。

先是…壁立　『日本詩史』巻四に「少時負レ才ヲ、不レ閑二小節ヲ。故ニ筮仕数跌ス。屢遇二困阨一、家徒四壁」とある。また、この条に続いて引かれる二詩も、その掲載

順序が前後してはいるが、ともに『日本詩史』巻四に収められている。蛻巖の仕官については、「自叙伝」に詳しい。元禄元年、蛻巖父勝秀の主君である蒔田定行は、勝秀への俸禄の代わりとして、蛻巖を加賀侯の儒官に推すことにした。そこで、加賀藩留守居役津田某と会し、約した蛻巖の雇用条件は、月俸百口あるいは三百石を賜わるというもので、これは加賀藩家老多賀信濃に通達された。元禄四年正月、定行が死去、同七月蛻巖は加賀侯に初めて拝謁する。さらに同年十一月には父勝秀も死去した。そして翌々年、漸く仕官が叶うはこびとなったが、その俸禄は月俸十口及び年毎の学資金三十両と、先の約束とは大いに違うものであった。蛻巖は、初めの拝謁から二年もの間放置され、大変な負債を抱えていたため、加賀藩を致仕し、兄毅齋と同様、舌耕にて生活を立てるようになった。元禄十年、加納藩の世子戸田光熙の儒師として月俸三十口で迎えられた。蛻巖二十六歳のことである。十年間仕えたが、宝永三年、病を理由に致仕。享保四年に明石侯から召されるまでの間に、四度も火災にあい、さらに妻帯（正徳二年）、長男も生まれ（同三年）、その困窮ぶりはいよいよ激しくなっていった。

其詠…徐文長集半部　「詠雪并序」は『蛻巖集』前編巻三所収。正徳三年十一月二十九日の作。『徐文長集』は明の徐渭の詩文集。三十巻。〈本文異同〉徐文長集――文長集

又嘗…猶突圍之句　「不能買書」は『蛻巖集』前編巻三所収。『蛻巖集』では、詩題の下の小字註に「正徳中在東都作」とあり、蛻巖が加納藩を離れた後の最も貧しい時期の作と知られる。〈本文異同〉なし

嘗小集賦詩。有一人。以石見國。如硯求對。苦思皆未得。蛻巖忽朗吟曰。竹生島似笙。四座驚歎。

嘗小集…四座驚歎　『梁田蛻巖全集』附録Ⅲ　梁田蛻巖研究「逸事」に「『其才俊敏』、「一日友を會して詩を賦せり。時に或人石見國如硯の對句を求む。衆苦思すれども未だ得ること能はず。蛻巖徐に答へて曰く、竹生島似笙と。一座嘆稱せり（明石志）」とある。なお『日本儒林談』（天理図書館蔵）では、この条に「口碑」との

書き入れがある。

蛻巖以詩豪厭一時。而意見屢改。格調數變。皆足以驚人。自言初學宋。歐蘇而旁放翁簡齋。中年學唐。祖禰李杜。緣飾以錢劉諸家。又退學明。甘爲王李銀鹿。亡幾爲袁中郎。爲徐文長。而遂以初盛唐爲表準。弇州濟南爲門戶。復鳴歸德書云。一旦大夢覺。宿酲解。乃斷然以開天爲關。七子爲引。陽春白雪每奏彌高。斗文紫氣每望彌昌。季子裘敝猶可改。呂虔刀鈍尚可磨。寧爲王李取履。不敢辭。遂使雨血之驚爪。化爲食椹之柔吻也。

蛻巖以詩…為門戶　「與湖玄岱」（前編巻六）に「僕カ詩屢変ス、毎ニ変スル欲ス驚サント人ヲ。遂ニ為リ二袁中郎ト一、又溯テ為二徐文長ト一…近歳忽悟リ二其非ヲ一断然トシテ以二初盛唐ヲ一為二表準ト一、弇州済南ヲ為二門戸ト一」と、「歐蘇」即ち宋の歐陽脩、蘇東坡から「弇州済南」即ち明の王世貞、李攀龍に至るまで、自らの好尚の変化を述べた条りがある。また『日本詩史』巻四にも「余按スルニ蛻岩詩體屢変ス。為レ唐ト為二宋元ト一、為二初明ト一、為二七子ト一、為二徐文長ト一、為二袁中郎ト一、為二鐘譚一」とある。他にも詩風の変化については後出「復鳴鳳卿」の引用箇所の直前でも同様のことが記されている。

復鳴帰徳書　『蛻巖集』後編巻之七所収「復鳴鳳卿」のこと。鳴帰徳は成島錦江。儒者。名信遍、後に鳳卿。字帰徳。元禄二年一月十五日生、宝暦十年九月十九日没、七十二歳。

一旦…柔吻也　〈本文異同〉一旦大夢覚。宿酲解乃断然以開天為関。――及一旦大夢覚宿酲解。乃知為風雅中一罪人。且悔且愧。断以開天為関。

〈参考文献〉『蛻巖梁田邦美』（一九六五年刊、兵庫県教育委員会他）
徳田武注『江戸詩人選集　第二巻　梁田蛻巖・秋山玉山』（一九九二年刊・岩波書店）
徳田武著『江戸詩人伝』（一九八六年刊・ぺりかん社）
黒田義隆編『梁田蛻巖全集』（平成八年刊・

野口泰信）

【補注】高橋昌彦「高野蘭亭伝攷（上）」（『語文研究』六十号、一九八五年）によれば、鶴楼の没年を元文二年と推定。また、成島錦江「鶴楼伝」（『事実文編』雑編六）に、享年六十五歳とある。

（田邉菜穂子）